

# 政治と映像

— 映画を教材とした政治学教育 — (2)

内藤俊彦・兵藤守男

## 目次

はじめに

### I 政治の場

#### 1 戦争

#### 2 差別(以上、第33巻第1号)

### II 政治の理

#### 1 大義

#### 2 決断(以上、本号)

## II 政治の理

### 1 大義

「大道廢レテ仁義アリ」(『老子』)が、ある程度の真実を含むとするならば、「大義」が声高に叫ばれる時代は、不幸な時代なのかもしれない。しかし、「大義」が底なしに貶められ、弊履の如くに捨てられて省みられない時代もまた、幸福な時代とは言えないであろう。他方で、平和な時代の平

凡な生活者達は、殊更に「大義」を必要としない。しかしそのような人々も、ある時ふと自分の生の意味を見つけないと思わないだろうか。自己の生をある「普遍的なるもの」と結びつけたいと思わないだろうか。その「普遍的なるもの」が、彼/彼女の「信心」の深い情熱に拘わらず、傍目には「イワシの頭」にしか見えなかったとしても。

映画に限らず、ドラマは好んで

「大義」に関わる人々を描く。単純化して云えば、それは、自ら進んで「大義」に赴く者の生き様死に様が、すでにそれ自体で窮めてドラマチックであり、人々の感動を呼び覚ますからであると言える。その場合「大義」は、社会正義であったり、人類愛であったり、祖国愛であったり、不正への怒りであったり、また、超越的なものに対する絶対的な帰依であったりする。

国王の離婚問題をめぐるトマス・モアとヘンリー八世との葛藤を描いた『わが命つきるとも』は、自己の信仰と信念に殉じて節を曲げず、ついに断頭台に登ることになるモアの孤独な戦いを描いている。この場合、友人の「現実的な」忠告や妻子の悲嘆にも拘わらず「大義」に殉じたトマス・モアを、「独善」と評することは出来ないであろう。「大義、親ヲ滅ス」(『春秋左氏伝』「隠公四年」)である。「親」は肉親であり、肉親間の親愛の情であり、倫理規範でもある。「滅」は「殺」である。衛の大夫石碯は、主君を弑逆した州吁と彼

に随う息子の石厚を誅滅した。世の君子たちは、「石碯は純臣である。大義、親を滅すとは、このことを言うのであろう」と評した。

「大義」は、親に子を犠牲とすることを求め、また、子に親を棄てると命ずる。「大義」はそのような生け贄を要求するのである。取えて言えば、そのような苦難を踏み越えて、敢然として「そのこと」を為すからこそ、「大義」の「大義」たる所以が生まれるのである。

もちろん、モアの孤絶の戦いを「愚行」と冷笑することは、冒瀆的である。「大義」を押し立てるとき、人は孤独を堪えなければならぬのである。「知己ヲ後世ニ俟ツ」という成句があるが、「後世」が「己」を理解してくれる保証なぞどこにもない。幕末政局における出处進退を批判した福澤諭吉の『瘠我慢の説』に応じて、勝海舟は「行藏は我に存す、毀譽は他人の主張、我に與からず我に關せずと存候」と書き送った。「行藏」は、世に出て道を行うことと世を逃れて隠棲すること、すなわち「出处進退」(「生き様」と言っ

てもよい)である。大変に含蓄に富んだ一文であるが、勝の言い分の一つは、オレは己の奉ずる「大義」に従ったまでだ、処断の現場において、他者(福澤)の褒貶の如きは些かも意とするところではなかった、と言うことであろう。勝は自己の「行藏」について、他者の「理解」を峻拒しているとも言える。

「大義」に殉ぜんとする者は、時には、その至高の担保者である「神」や「天」の意図にすら疑念を抱かずにはいられないほどの、深刻極まりない孤独に苛まれるのかもしれない。キリストは十字架上から叫ぶ。「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし」(マタイ伝)と。また、孔子は、匡の国人に危害を加えられんとした時、「天ノ未ダ斯ノ文ヲ喪ボサザルヤ、匡人其レ予レヲ如何」(『論語』「子罕 第九」)と、天の受命による文明の伝達者として己を宣明したが、『論語』は同じ篇に、「鳳鳥、至ラズ。河、圖ヲ出ダサズ。吾レ已ヌルカナ」と、孔子の悲嘆を記録している。聖人の出現を示す

瑞兆である鳳凰は一向に現れず、また、聖なる文様を甲羅に刻した靈龜も黄河の岸辺に出現しない。ワシの事業も窮まったのか、というくらいの意味であろうか。「大義」に賭けた人の生き様死に様の中には、他者の介在を峻拒するものがあると同時に、他者からの徹底的な疎外と孤立にも耐えなければならぬところがあるのかもしれない。そしてまた、「こよひ鶏の鳴く前に、なんぢ三たび我を否むべし」(マタイ伝)は、彼が、その熱烈な追隨者からも孤立していることの告白であるかもしれない。

しかし他方で、「大義」は、それが大掛かりであればあるだけ、それだけこれに比例して、その周辺にひしめく人々を強く巻き込むこともある。この様な渦巻き現象は、当人とその周りにいる人々の運命を翻弄し、人生を破壊する魔力を帯びる。つまり「大義」はデモニッシュな破壊力を持つ。そして、「大義」の通り過ぎた跡に、屍の山が累々と残される場合もある。そして、こうした場合、「大

義」の大竜巻の中で、傍観者の立場に踏みとどまることはきわめて困難であり、また危険でもある。この様な渦巻きが、カリスマ現象と呼ばれることもある。

繰り返すが、「大義」に殉ぜんとする者は、時には、その至高の担保者の意図に疑念を抱かざるを得ない状況に遭遇することがある。孔子やキリストにおいてすらそうである、況や常人においてをや、である。「大義」の要求する絶対的な自己犠牲の緊張に、人は永く耐えることは出来ない。そして、「大義」が、絶対者の召命から「イワシの頭」までの、実に多様な出現形態を持っているとすれば、なおさらそうである。そして、「イワシの頭」が大きくなればなるほど、「大義」は自己満足の領域に限りなく近づいて行くであろう。しかしそうは云っても、もちろん、「イワシの頭」がどこかに実体として存在するという訳ではないのである。時には、神の「大義」も「イワシの頭」に成り下がり得ることを銘記しておこう。

人々の行動の動機、あるいは理

由は通常複雑を極めるものである。人は、ある行動に単一の動機、あるいは単一の理由を見つけ出して能事終われりとする訳にはいかない。そんな説明は、三流週刊誌の読者をすら、満足させないであろう。しかし、奇妙なことに、自己の行為の一つひとつについて、執拗に理由を、しかも単一の理由を言い立てる人もまた少なからずある。それは自己合理化への過剰な欲求のゆえと言うこともできよう。そして、そのような説明に道徳的な合理化の臭いが強くなれば、それは偽善的な色彩を帯びてくることにもなる。つまり、「大義」は、自己の存在証明の終極の根拠でもあり得るが、また、自己合理化の道具でもあり得る。

以上を前書きとして述べて、一昨年と昨年に取り上げたいいくつかの映画について、以下に若干のコメントを加えながら、「大義」の種々相を見ることにする。

『炎のランナー』は、1924年のオリンピック陸上競技に出場した二人の英国人選手にまつわる実話に基づいた物語である。一人は敬

度なスコットランド人宣教師、一人はケンブリッジに学ぶユダヤ人学生である。一方は神の栄光を増すための道具として、ひたすら神のために走り、他方は名声とユダヤ人への偏見を逃れるために走る。ところが、トラック競技の決勝が神の定めた安息日に行われることになる。宣教師は安息日であることを理由として、凜然として走ることを拒絶する。そして、代表団長やプリンス・オブ・ウェールズやお歴々の、さり気なくしかし執拗な(つまり、英国紳士風の)説得にも拘わらず、彼は己の信仰の「大義」を守り抜く。結局、この競技はユダヤ人選手が走って優勝することになる。もちろん、物語がここで終われば、神の栄光はどこへ行ったのかと云うことになるのだが、物語はそんな竜頭蛇尾の終わり方はしない。彼の方も別の競技に出場してめでたく優勝する。

オリンピック競技の理念について説くことは暫く措いて、現在のそれは陰に陽に国威＝ナショナリズムの発揚の場であり、また、19

24年においてもそうであったように見える。そして、近代社会にあって、ナショナリズムは、人々の激情に火を付け彼らを生死の関頭に赴かせる強力な魔力を獲得するに至っている。これに辛うじて太刀打ちできるものは、惟うに、ごく稀な例外を除いて、神の「大義」の外にない。

国際競技と並んで、ナショナリズムを高揚させる最良の仕掛けの一つが、対外的危機の発生であることについては、大方の合意が得られるであろう。「自由・平等・博愛」という普遍的理念を掲げてヨーロッパを席卷したフランス革命が、諸国民の間にナショナリズムを呼び覚ましたという事実は、歴史の皮肉であろうか。そして「自由・平等・博愛」の「大義」が、フランス・ナショナリズムのスローガンへと成り下がった事情は、ミッテラン政権による国威発揚事業として大々的に企画された、フランス革命200年祭に徴して明らかである。イングランド政府がこのお祭りに冷淡であったのについては、またそれなりの事情があっ

たのであろう。

20世紀ヨーロッパの諸国民戦争である欧州大戦もまた、ナショナリズムの高揚のチャンスとなった。しかし現代の戦場には、そのような精神の高揚に見合う英雄性は存在しない。いな、「現代の戦場」だけではない、兵卒にとっては、いつの時代の戦場も英雄性と無縁であることは、フロワッサール『年代記』やグリメルハウゼン『阿呆物語』などに徴するだけで充分であろう。『西部戦線異状なし』は、精神の高揚と英雄性から、すなわち出征の「大義」から、見放された兵卒の喪失感を生真面目にしかし肩肘張らずに綴った物語である。

「無名の師」が兵士の士気と規律を如何に深刻に低下させるかを見ることによって、逆に、戦争における「大義」の果たす役割の大きさに気付くであろう<sup>(1)</sup>。日常的に慣れ親しんだ行為のレベルを越えて行動するとき、人は、自己の行動の目的を倫理的に武装する必要を感じず。そして、自ら意味を見出すことのできぬ者には、適

切な理由を与えてやらなければならない。しかしまた、「現実」が、「大義」を欺き、あるいは、「大義」の虚妄を暴くことも、歴史上にしばしば眼にするところである。『西部戦線異状なし』の主人公ポールは、最早いかなる「大義」をも信ずることは出来ない。兵卒の死がいかなる意味も持たないことを知ったからである。死が意味を持たないならば、いかなる生が意味を持ちうるのか。「大義」は、この問いに答えられなくなったとき、力を失うのである。

逆に、「大義」に目覚めれば、けちな詐欺師も、愛国者として雄々しく刑場で死を迎えることも出来る。『ロベレ將軍 (Il Generale della Rovere)』(1959)はその変身の物語である。ナチ占領下のジェノヴァで、ゲシュタポに捕まったけちな詐欺師が、地下の抵抗組織を探り出すために、密かに銃殺された抵抗運動の指導者ロベレ將軍に扮して政治犯の牢獄に送り込まれる。様々な経験を通して、彼はここで愛国者として生まれ変わり、ロベレ將軍として銃殺され

る。ヴィットリオ・デ・シーカが、小心でやくざな詐欺師から愛国の英雄への変身を見事に演じきっていたという印象があり、学生に見せたい映画の一つである。

『ウェールズの山』にも、欧州大戦の戦場で心に深い傷を負った兵士が二人登場する。主人公の一人、イングランド人の退役軍人である測量士アンソンとウェールズ人の少年である。アンソンの上役も、退役将校で酒に浸っていると紹介されているから、戦場で心に傷害を負った一人なのかもしれない。この映画は、ウェールズ人のイングランドに対する屈折した祖国愛(郷土愛)を、コミカルなタッチで描いた作品である。

1917年のある日、南ウェールズの寒村に二人のイングランド人測量士が現れる。地図作製のために丘陵の高さを測定し、1000フィート以上を山とし、以下を丘とすると言うのである。ところが、イングランドからウェールズに入って「最初に会おう山」として村人が限りなく誇りとする山が、測量の結果、高々20フィート足らず不足

するだけで「丘」と判定されてしまう。村人たちの自尊心は大いに傷付く。ブリテンの地図に「丘」と記載されることは、彼らにとって限りない屈辱と感じられた。とりわけ彼らに我慢のならぬことは、ほかならぬイングランド人によって、イングランド人の決めた(すなわち、ウェールズ人の何ら与り知らぬ)基準に従って「丘」と判定されたことであると思われる。ウェールズは数百年の間イングランドの支配と収奪に喘いできた。父祖伝来のウェールズ語を棄てて、イングランド語を強制されもした。しかし、アイルランドやスコットランドよりも、同化の歴史が長かっただけ、イングランド化は進んでいる。そしてその分だけ、ウェールズ人のイングランドに対する意識の屈折は複雑である。そしてまた、イングランド人の彼らに対する意識も、似たようなものである。アンソンの上役は彼らを *foreigners* と喚び、差別意識と不信感を露わにして憚らない。

かくして、村人たちは挙って、「丘」に20フィートの土を盛って

「山」を創り、再度測量させるために、詐術を凝らして、イングランド人を引き留める作戦に取り掛かることになる。彼等は、懸命に陰謀に身を入れながら、しかもイングランド人たちを翻弄するのを楽しんでいる風でもあるし、自分たちの行為のいかがわしさにも薄々気付いている風でもある。そして、アンソンも、村人たちの陰謀に薄々勘付きながら、それを愉快がっているようにも見える。その辺りに、コメディ・タッチの絶妙な風合いがある。

ところで、このような事態が生じた理由の一つは、戦争で若者が村を出払って、共同体が崩壊の瀬戸際にあったためだと、映画の中で説明されている。だとすれば、戦争で心の傷を負っているものは前線の兵士に限らない。銃後の国民もまた深く傷付いていると言える。しかしそのことは措いて、確かに、共同体の危機を克服するために、内部と外部の敵が摘発される（もし存在しなければ、作り出される）ことはしばしばある。村人たちの企みに懐疑的な小学校教

師は、裏切り者・国賊 (traitor) 呼ばわりされ、オマエはイングランド人なのかと罵られる。また、この村には炭坑があり、そこで戦時増産のために過酷な労働に従事する鉱夫の姿が点描される。こうした点からも、この映画の背後に戦時という重い社会背景があることを見逃すわけにはいかない。

こうして、村の牧師とその罪深い行い故に彼が不倶戴天の仇とするパブの主人“雄山羊のモーガン”<sup>(2)</sup>（そう言えば、あたかもこの物語の時代に、雄山羊と渾名されたウェールズ出身の英国宰相がいたように思う）が、村人たちを唆して企ての実行に奔走する。牧師は教壇から、神の摂理と天地創造まで引き合いに出して、ウェールズと村の栄光と誇りを訴え、而してまた戦没者と出征者たちに対する村の留守を預かるものの義務を説き（彼等が戦場で戦っている間に、この山が山でなくなってしまうとしたら、留守を預かるお前たちは彼等にどう説明するのだ）、様々に大義を並べ立てる。他方、モーガンは村人を使喚して

企みを実行する。渋る村人を説得するモーガンの殺し文句は、「お前のために失敗したと言われてもいいのか」である。

ここに「大義」を説く説教者と手を汚す実践者との分業関係が生まれる。もちろん牧師が実践に参加しなかったと言うのではない。彼もまた、村人たちに立ち雑じって、土くれの入ったバケツを何度も山に運び揚げ、ついに山頂で息絶えることになる。「大義」の説教者は、一兵卒として立ち働きの、一兵卒として死ぬことが、敢えて云えば、政治的に正しい振る舞いであるのだ。つまり、言葉を換えれば、「大義」の実現のために運動を組織化する場合には、道徳的にいささかいかわしい局面にも立会わなければならないのであるが、それは説教者には相応しくない行いなのである。

数年前まで、新潟大学法学部法学科の推薦入学に、「社会的な不正義を見過ごすことの出来ない者」という推薦要件があった。現在はこの文言に多少手が加えられて、「国内外の社会的諸問題に対

する強い関心と正義感をもち、現代社会の諸問題を公正かつ論理的に解決する能力に優れている者」となっているが、これらを推薦要件とした意図は変わっていないように思う。ところで、社会的不正義に「気付くこと」とこれを「見過ごさないこと」との間には、しかし、途方もない径庭が存在する。その不正義が権力者によって犯されている場合には、このへだたりは一層大きくなる。場合によっては、人は世界全体を敵に廻すような恐怖感に捉えられるかもしれない。そして、アクトン卿が言うように、「権力は腐敗する。絶対的な権力は絶対的に腐敗する」のである。されば、権力の不正を見過ごすさないために、我々は、途轍もない勇気を調達して掛からなければならないのである。ところで、アクトン卿のこの言葉は余りに陳腐になってしまったが、それはアクトン卿の罪ではない。このマキシムを忠実に実践した権力の罪であり、斬新なフレーズを考え出す苦勞もせずこのマキシムを何度もマクラとして使用したジャーナリ

ストと政治学者の罪である。

『大統領の陰謀』は、かのウォーター・ゲート事件を暴き、糾弾したワシントン・ポスト紙の新聞記者たちの物語である。民主党全国本部への侵入事件を手がかりにして、大統領とホワイトハウスを巻き込む一大陰謀事件を暴き出し、遂にニクソンを辞任に追い込む新聞記者たちの活躍は、広く知られているところであるから、ここで繰り返さない。ただ、些細な事件を手掛かりとして、巨大な背景の存在を探り当てたジャーナリストの直感力と推理力は、称賛に値すると思われる。

新聞記者たちを権力者による犯罪の摘発へ駆り立てた動機は、なによりも、社会の木鐸としての使命感、正義の実現を目指すひたむきな勇気であろう。しかし、功業と名声への野心が全くなかった訳でもないだろう。そしてもちろん、後者の存在が、前者の徳性を傷付けるといふ訳のものではない。むしろ、功業と名声への野心は、使命感によって一層力強く躍進するであろう。そして、野心によって

使命感はますます高揚するであろう。「大義」を唱え「大義」を行う者に、絶対的な無私を求めるのは、現実的ではないし意味もない。もちろん、結果として、絶対的な無私に発する場合もあり得るだろう。しかしそれは極めて稀な事例である。むしろしばしば、野心と「大義」が調和的に協働したとき、事業は大きな成果を収めるように見える。

『プルターク英雄伝』に、アレクサンドロス大王がインドに攻め込んだ時、賢い者10名に質問し、最初に正しい答えを与えることが出来なかった者を殺すという条件で、次々に難問を出したという話が載っている。大王は五番目の者に訊いた。晝と夜とどちらが先に出来たと思うか。答えて云った。晝間の方が一日だけ先に出来た、と。大王が驚いた顔を見ると、附け加えて、困難な問いには困難な答えが必要だと云った<sup>(3)</sup>。運命のイタズラで私が「大義」について書かなければならない羽目になって、一応答案らしきものを書いた

が、命永らえんがために、古代インドの賢者が用意して呉れた弁疎をここで急いで援用させて戴くことにする。

「大義」とは殆ど無関係に暮らしているように見える現代の大多数の学生諸君が、これをどのように捉えるのか。個人や集団のアイデンティティの作り方や、変動期における政治運動の組織化に果たしている「大義」の機能などを、学生たちと一緒に考えたいと思ったのが、このテーマを選んだ理由の一つである。取り上げた映画は少しばかりオーソドックスに過ぎた嫌いもないではない。やくざの仁義の世界や裏切り者の世界を扱った映画も使いたかったのであるが、時間がなかった。本稿で、「二代目はクリスチャン」、「いちご白書」なども取り上げたかったのであるが、こちらの方は、力不足で料理しきれないところがあった。(内藤)

## 2 決 断

法理と言っても政理とはあまり

云わず、政治と理との関係はわかりづらい。儒学風にいても理には天地自然の原理から世間の道理まで色々ある<sup>(4)</sup>。理を当面原理や道理に見られる筋道だと考えてみる。筋が通っているというイメージである。題目の相方である政治はそれ以上に意味が広い。「あいつは政治家だ」の政治もあり、「危機こそ政治の出番だ」の政治もあって、好みのイメージが読み込まれやすい性質を政治は帯びる。「何でも政治になってしまう」が、だからといって「何でも政治なのではない」点に注意して、ここでは、政治を「問題=困った事態」への対応や対処(management)と考えておく。とすると、政治の理とは、問題への対応や対処に見られる筋道となるが、これが単なる筋道に留まらないのは決定と関わっているからである。あるいは、政治の一つの役割は関係者に受け入れられる決定を案出することだとも言える。

もちろん、決定にも種類がある。決定が選択ならば、昼食のメニュー、今晚観るテレビ番組、終末の

過ごし方など日常生活は決定に満ちている。こうした日常生活の決定は、習慣や惰性などにより選択を意識しないものが多く、意識するにしてもさほど迷わない。反面受験や就職、結婚など、長期にわたりかなりの程度選択に悩む問題がある。他者の生活や人生に影響を及ぼす、つまり社会的にも重要な決定である。本人に選択の意思があり、選択を強いられる状況があつて、選択の結果やその責任を自覚しているから悩んだり迷ったりする。もとより選択しないことを選択する場合もあつて、選択を回避する理屈を考えたり、状況を作り出すのも時に必要な智恵となる。

このように決定が選択だと考えれば、決定は選択に至る過程を含んだものとなるから、むしろ決定の瞬間は選択行為の断念や放棄でもあつて、決意に至る過程が政治となり、その限りで決定は政治の中断や停止を意味する。この決定の瞬間を決断と呼ぶことにすれば、ある選択が少なくとも本人に重要だと判断されれば、その分だけ決

定は決意を必要とし、決定の決定らしさは決断に現れるように思える。意思 (mind) が意志 (will) と交替する時であり、決断は政治の否定をイメージさせる。一方で、まさに決断しようとする人こそ、政治の渦中にいるともいえる。グラハム・T・アリソンの名著『決定の本質』は、キューバ危機の経過を辿りながら、ソ連による核ミサイル配備に対応するアメリカ政府の苦悩を描き、ケネディー政権が第三次世界大戦を回避したと評価される政策形成の過程を三つのモデルで説明する。この三つのモデルのいずれにも説明能力に長短があるのは当然のこととしても、アメリカ政府のこの決定が単に政府関係者による合理的判断の産物（第一モデル）ではなく、また関係組織の利害調整やその合力の結果（第二モデル）でもなく、まさに主要政治家の決断の結果（第三モデル）だと描かれた方が政治らしく思えてくる。この場合説明対象は決断への過程であっても、重点は決断にある。政治は単にルールやルールに基づいた行動ではな

く、観察者はしばしば決断の瞬間をドラマとして読み込み、古めかしい言葉を用いれば、実存を共有する。そして、政治が問題への対応や対処ならば、政治に一般解は求められず、固有現象にこそ政治の政治らしさが現れるから、特定の状況に置かれた人が決断を下そうとする姿にこそ、正しく政治らしさが顕れる。その意味で決断は政治の微分である。また、決断が後世に大きい影響を及ぼしたと判断されれば、歴史の決定的瞬間と呼ばれる。シュテファン・ツヴァイクが著書『歴史の決定的瞬間』の中で「封印列車」など各章の副題に「レーニン 1917年4月9日」として、主人公と年月日を付けるのは、そのあたりの事情を表している。

このように政治と決断との関係は落ち着かず、仲と不仲が循環する。では、この決断をどのように説明するのか。換言すれば、決断と理との関係である。近代の人間観は合理性と主体性を重視する。しかし、合理性と言っても、決断した理由は詰まるところ本人にも

わからないし、その理由には必ずしも相応の合理性が見出せるとも限らない。大事な決定に限って「エイヤー」と決めるからである。あるいはそもそも人間行動に伴う合理性は単数ではない。合理性も価値判断に左右されるだけでなく、状況の関数でもあり、状況次第では合理性が複数存在しうる。また、言うに足る主体性も決断に随伴するとは限らない。好きな人への心情告白など一般人が共有している体験を想起せれば、主体性の要請（「正々堂々とプロポーズ」）という重圧に耐えられない場合も少なくない。この場合、意思表示の意志が問われている。従って、大事な決定に直面して自然の流れに委ねることもあり、失敗を先取りすれば、「自由＝主体性からの逃亡」もまた自然な行動である。偶然に身を任せるのも一法で、ジャンケンやコイントスも馬鹿にはできない。国政の帰趨を左右しかねない問題で孤独な決定を強いられる大統領や首相は責任の重大さを痛感し、時に占いに頼り、教祖のもとに馳せ参じる。あるいは、仕

方ないと決めつける便法もあり、状況に身を委ね、勢いや成り行きで決めてしまうことになる。従って、神や仏の前で誓うのは主体性確認の儀式である。さらには、選択の理由を他者のせいにするということもある。自分のせいではないという言い訳を準備する。いずれも、主体的決定からの逃避行動である。もちろん、逃避にも積極と消極との区別があり、「何となく」は、状況への対応をもはや的確には意識できないか、意識したくない心理状態を表す。

決断の後にその理由を問われれば、合理性と主体性を含めた回答は出せる。換言すれば、合理性と主体性を述べるのが他者の理解や了解を獲得する鍵となる<sup>(5)</sup>。「何となく」という回答は正直ではあっても、他者の納得は得難い。そこで、合理性や主体性の欠如を弁明したり弁解したりした後知恵が働いて、回顧すれば決断の理由が分かった気にもなるが、「理屈は後から貨車一杯」と教えられる。結局の処行動の動機も様々であり、理に適った説明を欠く事例も多い。

そもそも合理性は事後になって分かるという性質を帯びるからである。だとすれば、決断の理は理外の理であって、無理ではないにしても、非理だと思えることもあり、結果の評価によっては妙理だと納得してもらえることもある。

人生や社会の行く末を左右しかねない決断は、他人事だからあるいは他人事ながらも、観察者を魅了する。追体験によって当事者の苦悩や煩悶を味わうだけでなく、観察者が爾後の人生で迎える決断状況に備えたヴァーチャル・トレーニングともなる。もとより、他者の体験談が自らの人生教訓になりうるかどうかは結局の処わからず、「歴史の教訓」は必ずしも学習されない<sup>(6)</sup>。適切な言動の基準が見あたらない時に発揮される上質の言動を知性と呼ぶことにすれば、追体験は知性の涵養を保証することはなく、疑似体験の累積はそれに見合う投資効果をもたらすとはいえない。しかし、決断の仮想体験が「本番」では気休めとなり、状況判断の余裕を与え、行動基準を指し示すことも期待はでき

る。とりわけ視覚教材の代表である映画の鑑賞には当事者ではない気楽さがある、劇場やお茶の間で味わう緊迫が当事者気分を授け、臨場感に没我を味わえるにしても、決断の状況を比較的冷静に見つめる学習機会を与えてくれる。この意味で、映画は人生経験や生活体験に乏しい学生には心理練達の教材となる。本演習では決断をテーマとして、『ハムレット』などを上映したが、他のテーマで扱った映画とあわせて、決断を考察することとしたい。

『炎のランナー』は、1924年の第8回パリ・オリンピックが舞台である。主人公の一人、スコットランド人でラグビーの名選手(リデル)は引退後牧師となるが、人並みはずれて足が速く、この神から与えられし物(gift=天資)を時に披露するよう地元の一般信者にせがまれる。リデルは次第に走ることに神の啓示や恩寵を見出し始め、敬虔な精神生活を送るよう求める妹の懇願を断ち切って、連合王国の代表としてオリンピック

に参加すべく、国内予選を勝ち上がった。ところが、パリに向かう途中で、参加予定の種目が安息日に実施されると判明し、レースへの出場を辞退しようとする。連合王国のオリンピック委員会は国の威信を賭けて金メダル候補リデルの出場辞退撤回を試み、王族までも説得工作に担ぎ出した。また、リデル本人も、欠場が神の御心に適うものかどうかの判断で迷う。何よりも全身全霊で走っている瞬間に神との遭遇を体験しているからである。果たして、出場するのかもしれないのか。どちらが本物の信仰なのかを判断しきれない牧師の苦悩があった。そして苦慮の末、リデルは欠場を選択する。しかし、オリンピックに参加していた仲間の好意により、別の日のレースに出場することとなり、このレースで勝利して凱旋帰国を果たした。安息日に欠場するとした決定への疑問も、結果的にはこの勝利で帳消しとなった。信仰心を守り、かつ栄冠を勝ち取ったリデルは賛美を受ける。特に、もう一人の主人公で、立派な英国人として、また

ケンブリッジ大学の模範生として認められたいがためにコーチを雇うなどアマチュア選手らしくない手段を用いたユダヤ人との対比で、リデルの清々しさが描かれている。このユダヤ人学生は、勝利にも微笑まない。

安息日の欠場は昔話ではなく、最近でもオーストラリアのラグビー選手がワールドカップ出場を辞退した例が知られている。信仰心が篤ければ欠場も当然だとひとまずは考えられても、実際には神の御心は手に取るようには分からない。出欠は本人の価値選択や気分の問題に過ぎず、決断は自己の納得と周囲の説得という作業であって、リデルは欠場を選んだ。他のレースでの勝利がなければ、欠場の決定を後悔したのかどうか、もとより判断できる材料はない。それでも、ラグビーという、他の競技に較べれば今でもアマチュアリズムとフェアプレイが重要視されるスポーツで養われた精神が、安息日の欠場という形式の保守を生み出したとも考えられる。世間の礼賛ではなく、神の栄光が選択の

鍵となっていて、決断の純度が「売り」である。

つかこうへいの小説が映画化された『2代目はクリスチャン』も、同じく神の御心が測りきれずに苦悩する姿を描く。敬虔無垢で明眸皓齒のシスター（キョウコ）は、天竜組組長の息子がヤクザを止めるとの条件で結婚を承諾するが、この息子が殺されたために二代目組長の責を引き受けることになってしまう。もちろん元来神に仕える身だから、隣人愛をモットーとする。ライバルの黒岩組が天竜組の利権を奪おうとし、数々の嫌がらせをしても気にしない。組員も「シスター＝親分」への想いから苦痛に耐える。それに、天竜組は、素人にシャブを売って儲けるような暴力団とは異なるとの自負がある。キョウコは組員の矜持と忍耐を評価し、以降も冷静に対応するように説き、洗礼を受けさせる。キリスト教の世界とヤクザの世界とは、一方が隣人を愛し、救すことを求め、他方が隣人の殺害を厭わないという違いはあっても、神と親分への「忠義」の構造で似て

いる部分もあるから、組員も親分たる修道女に従う。少々のはあっても、「キリストはんの顔を立てる」というわけである。しかし、組への嫌がらせはついにむき出しの暴力行使へと進む。組とは無関係の、教会で保護されている子供たちにも被害が及び始める。また、キョウコは自分がヤクザと「売春婦」との間に生まれた子供だとの「秘密」を教えられて動揺する。それでも、敵討ちを企む組員を修道女親分は叱咤する。右の頬を殴られれば、相手の気持ちが済むまで左の頬を出し続け、この試練は神の与えたものと解釈しようとする。信仰心が自重を求め。だが、祈るだけでは解決しない事態を迎えた。信者=子分が次々と殺される現実に、神は助けたくないのかとの自問が続く。ついに、キョウコは信仰を「棚上げ」する儀式を執り行った後、黒岩組の事務所になぐり込みをかけ、仇討ちを果たす。そして、事件後キョウコは自分に好意を示していた警官の計らいで、日常生活に戻る。

教会の内外では別の倫理が通用するという「常識」は、マフィアを扱う映画でも繰り返し描かれている。しかし、それは俗人の宗教生活には妥当しても、信仰エリートを自認する者には直截には当てはまらない。汚れた日常であるからこそ、神の意志に従って生きることが尊い使命となる。それでも、キリスト教徒であることとヤクザであることとは必ずしも矛盾しないし、双方の世界は妙に行ったり来たりできて使い分けられる。では何故それまでの人生観をシスター親分は「捨てた」のか。被害が自分だけで済むなら、非難が自分だけに向けられるなら我慢もできる、しかしこの仕打ちは…と考えたなら、やはり良くも悪くも無垢(innocent)である。それでも、耐え難きを耐えきれず、自制の蓄積が教理を捨てさせた。時代劇や任侠物に典型となる筋書きでは、善人が自ら堪忍袋の緒を切ることは正当だとして喝采を浴びる。この場合、結局主人公には信仰心が足りないのだという批判は正論であるにしても、人間は生物(ナマ

モノ)である。キョウコが信仰を文字通り棚上げにする場面は、理不尽に対抗するために理不尽な行動を採らざるをえないと自己を説得する独白に溢れている。とりわけ、神の冷たさと己の愚かさへの怒りが決断を促した。『炎のランナー』のリデルとの違いは、実はそれほど大きくはない。ただ、リデルは進もうとして最後に退き、キョウコは進もうとせずに最後に突破した。両者の違いは問題が及ぼす影響範囲や深刻度の大小であり、また準拠基準 (frame of reference) を培う文化の体臭でもある。

他者からの暴力に対抗すること、特に抗いがたい存在へと立ち向かう際に生じる不安や恐怖も前進する度に決断を強いる。『大統領の陰謀』は、ニクソン大統領のウォーターゲート事件を扱った作品である。ワシントンポスト紙の新米記者二人は、民主党全国本部 (ウォーターゲート・ビル) に不法侵入し、盗聴器を付けようとした者が逮捕される事件を知る。共和党のニクソン再選は決まっているの

に、何故わざわざ盗聴するのかという疑問が浮かぶ。しかも、大統領は聖書に手を置き、言論の自由などを定めた憲法順守を神に誓う存在のはずである<sup>(7)</sup>。記者は裁判を傍聴した。金も無さそうな容疑者が電話もしないのに弁護士がすぐさま駆けつけた奇妙に大事件を予感する。そして、情報提供者 (deep throat) の指示に従ってこの盗聴事件を調べ始める。正体を明かさな情報提供者は「金を追え」と云うが、はっきりした証拠はなかなか出てこない。しかも調べれば調べるほど、大統領特別顧問や元司法長官など大物の関与がわかってくる。つまり、映画の題名通り、「みんなが関わっている (All the President's Men)」。その事実は何よりも取材に応じた関係者の沈黙や証言の撤回が物語っている。背景には大統領がいるとの確信が深まる。記事にすれば、正義アメリカの象徴であり、アメリカ国民の父であり、最高の権力者である大統領を裁くことになる。書くのか、書かないのか。記者は身の危険を感じながらも一貫して

書くことを選択する。これに対し、二人の上司である主幹の悩みは別種である。記事を紙面に載せるのか、載せないのか。有力紙はこの件から手を引いている。何よりも証拠が圧倒的に足りない。怖れるべきは、国民か、業界か、それとも政治権力か。主幹は二人に徹底した取材を命じ、最終的には二人にゴーサインを出した。そして、事件の全貌が明らかになる前にニクソンは再選されるが、就任二期目の途中で、事件のもみ消し工作を指示したことを認めて辞任する。もちろん、二人の記事が一役を買っている。

実はニクソン大統領がはめられた、ヘイグ大統領補佐官(後の国防長官・国務長官)がその黒幕だという話もある<sup>(8)</sup>。事の真相はわからなくても、ともかく大統領の周辺が関わっていたのは事実のようである。新米記者と主幹とは逡巡の理由が異なっていた。新米記者は若さ故の突進であり、失う物を考慮せずに済む強みがあるとともに、名声願望が正義追求と重なった。それに加え決断の日常

化が不安や恐怖を麻痺させた。主幹は二人の取材の方向が間違っていないと信じて、ペンが振るう暴力を自覚している。主幹の決断は職業倫理が勝利した結果だといえ、話が出来過ぎにしても、覚悟を強いるだけの決意を必要とした事件であって、観ている者は動機と行為の純粹な結合に少なからず感動する。

たとえ不正を働いたとしても、その不正を正直に述べるには尋常ならぬ勇気が要る。それまで築いてきた経済生活や信頼関係を全て失う恐怖が先立つ。こうした決断に直面した人を描いた作品に『クイズ・ショウ』がある。この映画はテレビ普及初期の1957年、クイズ番組で実際に起こった「八百長事件」をもとに作られている。この番組は高視聴率を誇っていた。しかし、数週間勝ち続けていたユダヤ系庶民のチャンピオンがスポンサーには気に入らない。あれでは視聴率が伸び悩んでいる、思うほどには稼げていないと文句を言って、番組ディレクターに新たな人材を探すよう依頼する。そこに

偶然現れたのは名門出身のハンサムな大学講師（ヴァン・ドーレン）である。講師の薄給とクイズの賞金との落差に魔がさしたのか、ヴァン・ドーレンは八百長を引き受ける。いや、当初八百長の自覚はあまりなかった。ともかく、クイズの答えを予め教えてもらって番組に臨んだ。次第に、勝利に酔う自分を知り、わざと答えに窮する演技にも磨きがかかってくる。それと同時に戸惑いが生まれ、罪悪感へと変わり始める。しかも、番組に捨てられた元チャンピオンが告発を始め、一人の検察官がやらせに気づく。やがて八百長疑惑解明の公聴会が開かれ、ヴァン・ドーレンは告白するかどうかを悩む。単純な訴訟事件なら地獄の沙汰もカネ次第で、法廷外の観客を引き込んで無罪を勝ち取ることもある<sup>(9)</sup>。主人公は公聴会に向かい、八百長を告白した。

この映画の主旨は本来異なるところにある。テレビ大衆社会におけるヒーロー、娯楽番組における真実、テレビと商業主義などが考えられる。告白を行ったのは、テ

レビ世界とはかなり距離のある家柄出身のエリートであり、だからこそ、告白もまた様になるともいえる。主人公は知識人ゆえに不正を自覚しており、告白の選択は自発的であるから、苦心の構図もわかりやすい。主人公の苦悩は、結局の処偽りの自分に対する嫌悪であって、告白を引き留めるのは名誉失墜への恐れからであり、悪いことをしても正直に言えば、誰でも称賛されると考えるのは世間を単純化しすぎる。育ちのいいハンサムな青年だからこそ、自らの罪を認めれば、大衆はかえってこれをヒーローにふさわしい態度として受け入れ、取り巻きであるテレビ局の関係者を専ら悪者に仕立て上げる。誠実な世間知らずの若者をはめたのは、商業主義に浸かった組織だという仕組みである。残酷な行為も総統（ヒトラー）はご存じないので、周りの仕業です…とする大衆心理である<sup>(10)</sup>。尤も、テレビがニュースで事実を報道する姿勢を示しても、事実探求の方針がすべての番組を拘束するわけではなく、ましてそもそも作り物

のクイズ番組など事実報道とは別世界の娯楽作品だとする開き直りにも五分の理がある。それだけに、主人公の告白は、テレビ関係者には欺瞞や道化にも映る。

以上の4作品は、主人公の苦悩と決断への過程を描く。主人公の決断が新たな状況を創り出したにせよ、いわば忍耐切れや時間切れの決断である。その限りで、原稿の締切同様、期限の設定は決断の制度化であり、儀式的効用の1つは決断の強要である。ところが、日常生活の決定は成りゆきの世界に属し、ちょっとしたきっかけから関わりを持ち始め、行き詰まり、引き返せない状況に追い込まれたときに、やむを得ず決断を下すということも多い。そもそも主体的に状況を作りだしたわけではないから、決断を迫られる瞬間にも成りゆきに身を任せる選択が好まれる。では、最後まで成りゆきに任せきれものかどうか。それで物語は完結するものなのかどうか。これに関する作品を3つを取り上げて、もう一つの決断を考えることにしたい。

『いちご白書』は、60年代のいわゆる大学紛争を描いた作品である。振り返れば、学生運動への参加には色々な動機や理由があったのだろう。ヴェトナム戦争への反対が目立つのは、運動の目的がはっきりするからであり、敵の明示は正義の確信を助ける。しかし、この映画の主人公が運動と関わったきっかけは社会の不正追及ではない。ポート部に象徴される真面目で真つ当な大学生活に退屈を感じながら、運動に参加する同世代の学生への漠然とした関心がある中で、生真面目に運動に取り組む一人の女性への具体的な興味である。この興味に運動への関与が持続し、ケネディ、チェゲバラ、毛沢東の肖像画を掲げて大学に立てこもる連中との共同生活を楽しみ始める。だが、やたらと腹を立てる自分の変化にも気づく。やがては「国が腐りかけている」と思い始めるようになり、筋金入りの黒人運動家から溢れるエネルギーに躊躇いを感じながら、留置場にぶち込まれた経験をきっかけに「獄中カリスマ=俺も一角のワル」に

なった喜びを精神安定剤とする。幼い頃の友人との柿泥棒のように、小さな悪行の共有意識は、強力で長続きする連帯を醸成する。映画の終盤で描かれる学生と警察との衝突場面では、無抵抗主義を原則とし、give peace the chance (John Lennon) と歌い続ける。建物の入口の敷石に「truth, liberty, toleration (真理、自由、寛容)」と書かれたキャンパスは「戦場」と化す。そして最後に主人公は、愛する女性を乱暴に連行しようとする警察官に飛びかかるシーンで映画は終わる。とはいえ、『2代目はクリスチャン』のように、耐えに耐えて爆発したというよりは、ただただ状況の中で条件反射的に行動したに過ぎない。

こうした成り行きは『俺たちは天使じゃない』の主人公にも共通している。この映画は、刑務所を脱獄した主人公(ネッドとジム)がカナダ国境近くの町に滞在しながら国外への逃亡を図る話である。ネッドは小悪で、世辞に長け、状況を乗り切る狡さを備えている。これに対し、ジムは自分との折り

合いが必ずしもついていない。ネッドが状況を作るタイプならば、ジムは状況に流されるタイプである。2人は脱獄後国境の町に辿り着くが、幸運にも遠方より当地を訪問することとなっていた著名な神父と間違われる。もちろん、何度か偽神父だとバレそうになる。しかし、その度にネッドは、気が小さいから誠実な人に見えるジムを担ぎ上げる。周囲はジムの頓珍漢な言動に戸惑いを憶えながら受け入れ始める。特に、1人の素朴な若者がジムを正真正銘の神父だと信じ込み、ジムもその若者の誠実に引かれ、この修道院生活に人生改心の可能性を見出したりもする。やがて、この教会が誇りとする「マリア像」がカナダへと一時的に移される祭りにかこつけて、二人はアメリカ脱出を試みる。この日も例の通りジムは運悪く籤に当たって、公衆の前で演説をする羽目に陥った。しかし、門前の小僧よろしく、ジムは自分の経験を語ることで公衆の支持を受ける。この公衆の喝采をみて、教会関係者もようやく二人が本物の神父で

あると確信する。そして、脱出の時が来た。マリア像を掲げる行進が国境の橋を渡ろうとする時、騒動が起こって、ネッドが逃亡の一助にと連れてきた母子の子供がマリア像とともに川に落ちてしまう。自分があくまでも神父の演技中であること、その母親に口がきけない子供の病気を治す話をしてしたこと、色んなことがその瞬間にネッドの頭を横切ったというよりは、仕方ねえなという気持ちで川に飛び込み、その子供を助ける<sup>(4)</sup>。子供は落下の衝撃で話せるようになり、2人が神父などではないと証言する。二人の正体が発覚したにもかかわらず、都合のいい誤解(神父ではなく、牧師だったのか…)と人命救助の勇敢で無罪放免となり、母子ともにカナダへと無事脱出が認められる。ところが、ジムは教会と若者のことを想う。カナダへ向かおうとするネッドにジムは別れを告げ、教会へ戻ることを選択する。ジムの性格から判断すれば人生を左右する決断だったかも知れないが、やはりふと気持ちが教会に向かったのであり、それ

をネッドも仕方ねえなと見送る。ジムの行動には優柔不断がつきまとう。教会へ戻ることを選択した理由は、信仰への目覚めというよりは、自分を意味あるもの(something)として受け入れてくれた人達との離別の寂しさであり、雑ばくに言えば後ろ髪が引かれただけである。だから、また何かの機会があれば、あっさりと教会を去るのだろう。

『俺たちは天使じゃない』に較べれば、『オネアミスの翼』には幾分決断らしさを窺わせる場面がある。これはオネアミス王立宇宙軍に属する軍人(シロツグ)が人類史上初の有人宇宙飛行に成功するまでを描いたアニメである。平凡な軍人シロツグは、街角でひたむきに終末への準備を説く女性の存在がきっかけとなって、この無謀な企てに志願した。たとえ女性の行為が馬鹿げているように見えても、女性の健気に興味を抱き、その行為を支える動機の素朴に感動し、親を失った子供の世話をする献身に心を引かれ、そして己の生活の体たらくを痛感した。だか

らこそその突然の決意表明であったが、最初はまだ本当に飛ぶとは思っていない。それでも訓練を続けるうちに自覚が湧いてくる。しかも、予想以上に準備が捗り始め、ヒーローとして奉られ始める。一方で、国民が日々の食事に事欠く実情を目の当たりにして、莫大な費用をかけてまで宇宙に人を送ることの意味を考えさせられる。また、慕っている女性が借金を重ねた結果、住んでいた家を壊され、子供とともに知り合いの教会へと追いやられる現実、己の無力を憶える。やがて、有人宇宙ロケットは完成に近づくが、それまでくすぶっていた周辺諸国との関係が悪化し、ついに戦闘状態にはいる。敵軍が基地に近づき、発射が中止された時、シロツグはそれまでの消極態度を一変し、仲間を勇気づける演説をぶつ。それでも、宇宙へ飛ぶ決断をしたのではなく、せっかくなこここまでやってきたのだからという理屈で、周辺状況から判断される合理性は乏しい。やけっぱちで、どうせならやろうという意志である。そして、ロケットは

無事発射され、大気圏に至り、シロツグは宇宙から地球を見つめる。

この3つの作品の共通点は、近代主義が想定する合理性と主体性に富む行動の欠落である。人生を左右する出来事に接しながら、それでも動機は出来事からはそのまま導かれない。この動機が不純であるかどうかは別として、少なくとも決断を要してはいない。あるいは決断らしさが感じられない。もちろん、いずれの作品にも意志の表明はあるが、選択の決断に伴う戸惑いが感じられにくい。どちらかといえば、その瞬間「その気」になっただけだと言える。

『俺たちは天使じゃあない』と『オネアミスの翼』を上映後、学生のレポートの中に、「決断の理が現れにくい、『その気』では分かりづらいから、考え方を示して欲しい」という要望があった。学生も主体性と合理性を求めているのだらうと推察される。そこで、翌週の時間に以下のような「説明」を配布した。

「『シロツグは宇宙飛行士になりました』では、説明になってい

ないとされる。「何故?」が説明されていないからで、行為には動機があり、行為の説明には動機の説明が必要だという。人は自らの行為の主人 (sovereign) だからであり、行為の主権者であるから、行為の責任をとる義務が発生する。これが西洋風近代主義の人間=社会観であり、日本の様々な現行制度の底に流れている考え方でもある。英語では、「What made her do so? (何が彼女をそうさせた)」は、「Why did she do so? (何故彼女はそうしたのか)」と等値であり、書き換え可能だと考えられているらしい。この主体神話は、行為の因果を動機と状況から説明できると考え、そうしようとするもので、これによって説明される行為も少なくない。しかし、この二つの文は、やはり何かが違う。それに、「What. . .」の方も因果への拘りが濃厚である。「成り行きで」や「引っ込みがつかない」あるいは「モノのはずみ」や「仕方なく」というのもあるはずで、これを近代主義モデルでは、どのように説明するのだろうか。

主体が状況に左右されたとか、周囲の意思に翻弄されたと説明するのか。説明できない因果を偶然と呼んでも、結局は了解が求められているに過ぎない。状況や他者で説明できれば、主体・状況モデルは雄弁だが、何とも説明しきれない事例が残る。

「その気」はあって、「この気」、  
「あの気」といった指示的な表現は用いられない。さらに言えば、「気がする」とか、「気になる」のであって、主体・動機と状況では説明しきれない、漠然とした世界の存在が示唆される。主体的に生きることが称賛されるなら、だらしな話で不人気だろう。それでも、ジムが演説が終わってガッツポーズを示せたように、周囲の反応(拍手喝采)に自信や確信を抱けば、そこには主体が登場し、もはや「その気」の段階は終わり始める。だから、「その気」は、西洋風に言えば、志向となるが、志向も結局は主体に拘った表現ともいえる。

また、「その気」であって、「その理」ではない。「理」なら説明

は可能だし、合理的な説明が求められるもする。『その気』について、説明は後知恵に過ぎない。『その理』なら弁明で、『その気』なら弁解になるだろうか。とはいえ、後知恵ではあっても、他者に説明する際には、わかりやすさや尤もらしさが求められるから、合理的になりやすい。あるいは、共感が得られやすい表現が好まれる。しかし、それでは『その気』の説明にはならない。『その気』という表現は、主体・状況や、合理性では、必ずしも説明しきれない『行為』を、理解する手がかりとして有効であって、主体と状況の狭間を埋めてくれる利点は、そう簡単には、捨てきれないように思える。

理屈に欠ける決断であっても、あるいは理不尽な選択でも、時に観る側はカタルシスを得る。物語が程良い終末を迎えたからである。とすれば、優柔不断の典型である『ハムレット』の人気は、ためらいへの同情よりは、等身大の人間への共感にある。『ハムレット』は決断の、あるいは不断の典型で、「To be or not to be, that is

the question」と、決断を先送りする。先送り (postponement) は、問題状況への対応に見通しが立たなければ、立派な戦術である。しかし、ハムレットの場合、意図的な先送りではない。悩むだけである。現世への未練がある。現状への不満がある。来世への不安がある。来世への逃避もある。父の弟は不実であり、国王としては失格でもある。しかも、母を奪っている。父の敵をとるべく、復讐に立ち上がるべきである。それこそが運命に立ち向かう男らしさというものである。こうした内省 (self-reflection) がハムレットを迷わせたとすれば、その人間らしさの資質が決断を挫く。ハムレットに欠けるのは、決断のための決断であり、決断のための決断のための決断である。先送りが続けば、それだけ決断の鎖はますます長くなり、決断の敷居は高くなる。無限の連鎖が好評を博するとは言い難いが、優柔不断はその意味で知的な資質の産物でもある。しかし、観る者は状況をドラマとして捉え、結末を知りつつ、主人公に英断を

期待するのであって、周囲の期待をも自覚するだけの知性が備わっているハムレットを演ずる俳優は、決断の素振りを見せて観客を魅了する。意思を行動に結びつけられなかったからというよりは、内省に足る知性を有している分だけ悲劇的である。だからこそ、決断を人は記憶し、優柔不断をたしなめる。それでも、決断ならば称賛されるかといえば、そうとも限らな

い。決断には、あるいは他者の共感や感動を獲得する決断には、その内容の充実とともに、様になっている姿が求められる。あるいは、そうした「様=スタイル」があるからこそ、他者はその決断を勇断だとして礼賛し、語り継ぐ。このスタイルあるいは行動の「美学」については次章「政治の気」で取り上げることとしたい。(兵藤)

#### 註記

(1) 例えば、シベリア出兵について、原暉之『シベリア出兵』(筑摩書房 1989)、石光眞清『誰のために』(龍星社、1968年)、松尾勝造(高橋治解説)『シベリア出征日記』(風媒社、1978年)などを参照。

(2) 「雄山羊」のシンボル表象は様々であるが、キリスト教では、雄山羊は、サタン、好色、悪臭を放つことから罪人や呪われた者を指すとある。アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』(大修館書店、1985年)、286頁。

(3) 河野与一訳『ブルターク英雄伝(九)』(岩波文庫、1972年)、90頁。

(4) 参照、辻達也編『日本の近世 2 天皇と将軍』(中央公論社、1991年)、51頁以下。

(5) 参照、升味準之輔「政治学と私(L)」『UP』(東京大学出版会、1989年9月、203号)。

(6) 参照、御厨貴「平成の首相官邸」御厨貴・渡辺昭夫構成『首相官邸の決断』(中央公論社、1997年)、253頁以下。

(7) 合衆国憲法第2条第1節8項「Before he enter on the Execution of his Office, he

shall take the following Oath or Affirmation: - "I do solemnly swear (or affirm) that I will faithfully execute the Office of President of the United States, and will to the best of my Ability, preserve, protect, and defend the Constitution of the United States.」。合衆国憲法修正第1条「Congress shall make no law respecting an establishment of religion, or prohibiting the free exercise thereof; of abridging the freedom of speech, or of the press, or the right of the people peaceably to assemble, and to petition the Government

for a redress of grievances.」。

なお、参照、飛田茂雄『アメリカ合衆国憲法を英文で読む』(中公新書、1998年)。

- (8) 参照、キャサリン・グラハム『キャサリン・グラハム、わが人生』小野善邦訳 (TBSブリタニカ、1997年)。
- (9) 参照、久保田誠一『グレイゾン』(文藝春秋、1997年)。
- (10) 参照、ミルトン・マイヤー『彼らは自由だと思っていた』田中浩=金井和子訳 (未来社、1984年)、第1部第3章。
- (11) 一瞬の躊躇う表情こそは、『ゴッドファーザーⅡ』を代表として、R・デニーロの十八番だろう。